のやり方も対象国の経済全体を標的にするのではなく，ターゲットを絞ったものが主流である。ミャンマーに対しては国防省と軍幹部，彼らの関連企業に経済的利益が入らないよう工夫しておこなうことに力点が置かれている。日本が制裁に加わらないまま「曖昧な態度を戦略的に貫く」場合，ミャンマー国民の支持を得ることはできるのか。政治学的な分析については様々に学ぶところがある本書だが，この点についてはミャンマー国民側の視点が欠けているように思われる。

おわりに

本書は『ミャンマー現代史』と銘打っている。現代史研究は何よりも書き終えたあとに生じる事象について著者が責任を担えないため，場合によっては書き終えた後の想定外のできごとの発生によって，執筆時点での現状評価や今後の想定分析が一気に裏切られるリスクを常に抱えている。特にそのリスクが高いミャンマーの「現代史」叙述にチャレンジした著者の心意気は高く評価したい。一方で「現代史」の範囲設定をどうするかという悩ましい課題が残る。本書は明確に1988年（民主化運動）から2021年のクーデターまでを「現代史」として設定している。そのため，それ以前のことに関する叙述は必要最低限にとどめている。それもひとつの英断だが，ミャンマーにおける「現代史」の範囲を考えた場合，日本占領期や英領植民地期までさかのぼらないまでも，1948年の独立以降の政治史をすべて含めたほうがより適切ではないのか。特に政治と軍との関係，民主主義の脆弱性，および少数民族問題というこの国に巣食う問題を考えたとき，そのような疑問が湧く。その意味において，本書はミャンマー現代史というよりも，ミャンマー現代政治分析の秀作だといえよう。

（根本　敬・上智大学名誉教授）

参考文献

中西嘉宏. 2009.『軍政ビルマの権力構造――ネー・ウィン体制下の国家と軍隊　1962–1988』京都：京都大学学術出版会.

――――. 2021.『ロヒンギャ危機――「民族浄化」の真相』（中公新書）東京：中央公論新社.

Nakanishi, Yoshihiro. 2013. *Strong Soldiers, Failed Revolution: The State and Military in Burma, 1962–88*. Singapore: NUS Press; Kyoto: Kyoto University Press.

弘末雅士.『海の東南アジア史――港市・女性・外来者』（ちくま新書）筑摩書房，2022, 268+xvip.

東南アジアを地理上，ユーラシア大陸の東南端に突出したインドシナ半島と，その東南方に展開する島々によって構成されると見て，前者を東南アジア大陸部，後者を島嶼部と呼ぶ［石井・桜井 1999: 5］慣行があるが，本書もそれを踏襲する（p. 16）。後者はさらに「海域東南アジア（Maritime Southeast Asia）」と呼ばれる場合があり，本書にも「東南アジアの海域世界」（p. 32）の語が現れる。けれどもそれは15世紀から17世紀の間に東南アジアの各地に港市が台頭したと述べる背景で，必ずしも「島嶼部」に限定されてはいない。したがって，『海の東南アジア史』という本書のタイトルは一見挑発的だが，東西海洋交通路の要衝に位置した東南アジア全体の地勢と自然環境を概括する以上の意味は無いと理解しておく。しかしながら，このタイトルの下，コンパクトな新書版で著者が描いているのは概括的な通史ではなく，独自の視点から東南アジアの成り立ちをまとめ上げようとの意欲に満ちた東南アジア史で，副題にある「港市・女性・外来者」という三つのキーワードによって腑分けされている。

本書の力点の偏りは，目次を見れば明らかである。紙幅の都合で，章別構成のみ示す。

はじめに　東西世界をつなぐ海の東南アジア／近現代東南アジアを形成した人々
第一章　近世東南アジアの港市――多様なネットワーク
第二章　外来者と現地人女性
第三章　近世後期の東南アジア社会――現地人首長とヨーロッパ勢力

第四章　　植民地支配の拡大と外来系住民
第五章　　新たな内と外の構築と国民国家
おわりに

概ね時間軸に沿いながら近世（15～19世紀前半）から近現代（19世紀後半～）を対象とする著者の念頭には，アジアの歴史について，「前近代と近現代を統合的にとらえる」（p. 9）という課題がある。

そのために著者は，本書の目的を「外来者と接触した存在（現地人女性，ユーラシアン，現地生まれの華人）をとおして，東南アジア海域世界の社会統合がいかに進展したかを検討する」（p. 11）と述べて，「仲介者」あるいは「内（現地社会）と外（外来者）の紐帯役」（pp. 12, 47）に着目する。この目的はまず，16世紀終わり以降進出したヨーロッパ勢力の植民地支配の進展を支えたのはこうした「仲介者」であったという著者の主張に寄与する。そればかりでなく，植民地体制が成立した社会では彼らが周縁化したことを認めながらも，やがて国民国家形成運動が展開する過程においても彼らが少なからぬ影響を及ぼしたとして，「彼らをとおして前近代から近現代に至る変化を通時的に把握する」（p. 13）と言う，冒頭に掲げられた「前近代と近現代を統合的にとらえる」という課題へのアプローチが試みられている。その結論は，「彼らは，前近代社会を支えつつ，近代を導いた存在であった」（p. 13）と総括され，こうしたアプローチの現代的意義も主張されている。

「仲介者」の活躍の場は港市であった。港市は，著者みずから別の著書［弘末 2004］で詳述しているように，あらゆる地域からの来航者に開かれて，多様な地域からの逗留者を抱えた「コスモポリス」（p. 36）の性格を有した。

重視されているのは，来航したヨーロッパ人に「新鮮な印象を与えた」（p. 68），近世東南アジアにおける現地人女性との「一時結婚」の「慣習」（pp. 67–68）が存在したことである。その実態として援用されているアユタヤの事例は，鄭和の遠征に参加した馬歓の『瀛涯勝覧』に載る些か怪しげな件で，同地の男が「おれの女房は美人だから中国人が喜んでいるのだ」と語ったとある。同一の箇所を，商業構造全体を支える親族ネットワークの形成に「一時結婚 temporary marriages」が寄与したことを早くに論じたアンダヤが逐一引いている［Andaya 1998: 13］。この前段には，「ここの習俗はあらゆる事がらはみな婦人がつかさどっている。……みな妻女に決めてもらう。婦人の知恵は男子よりよく勝っているのである」［小川 1998: 52］とある。引用箇所に続くのは，「アユタヤでは何度も外来者の一時妻となることは，それだけ多様な商業関係を有することを意味し，誉れ高いことであったのだ」（p. 69）という一文である。引用元が示されていないので著者の言と思われるが，馬歓の一節からはかなりの飛躍がある。そのような実態が存在したとしても，誰にとって「誉れ高いこと」であったと言えるのだろうか？ここで当時のアユタヤの民にとっての「誉れ」とは何を意味したかは問わないが，指摘しておきたいのは，「一時結婚」の「慣習」の含意の複雑さである。

外来者にとってこの「慣習」が好都合であったことは明白で，邦訳が刊行されて間もないリードの代表作においては，「一時婚 temporary wives」の「仕組み pattern」が外来の商人たちに「有利に働」き，彼らは「理想的な異文化仲介者」である「現地妻をもつことをビジネスの一環として理解した」と特筆されている［リード 2021: 43］。しかし，一時妻が原因で逆に確執が生じる場合もあった。著者はアユタヤでオランダ商館員が直面したトラブルにも触れている（pp. 70–74）。現地権力の協力が得られなくなった時，外来者が「重宝した」のは奴隷たちだった（pp. 74–77）。

一握りのアユタヤの事例に拘るのはフェアではあるまい。もとより著者の本領はインドネシア地域にあるが，「仲介者をめぐる資料が比較的多く存在する」（p. 13）という事情もあって，本書の叙述の中心はインドネシア，とりわけジャワにある。

ジャワでは外来者であるヨーロッパ人と一時婚の関係にあった女性たちを妻と見なし，「ニャイ」（著者によれば，「ねえさん」という尊称）（p. 97）と呼んだという。著者はこの「ニャイ」という現地呼称をもっぱら用いて，議論に多くのページを割いている。本書において「ニャイ」をめぐる記述が突出していることは，再び目次を一瞥すれば明らかである。以下のように，目次の小見出しに

「ニャイ」が頻出し（下線は評者による），小見出しに含まれない場合でも本文中の各所に「ニャイ」の語が踊る。

第三章　2 社会統合と女性　華人とニャイ／バタヴィアの社会統合とニャイ
第四章　4 東インドのユーラシアンとニャイ「白人」の文明の使徒意識とニャイ／ユーラシアンの描くニャイ
第五章　1 植民地体制下における諸集団の統合と文化　ムスリム vs. ニャイ・ユーラシアン／社会主義思想とニャイ

一説に，ニャイという言葉には「家計の切盛りをする人，使用人，家政婦，妻，売春婦など」の意味があり，「このうちどれが最も重要であったかは経済，社会，感情の度合いが相互に絡み合って決まるのであった」［ストーラー 2010: 277］。著者によれば，1924 年にオランダ人のニャイであった女性の「雇用主」殺害疑惑に対する無罪判決後，「婚姻慣行の一翼を担ってきたニャイのイメージは，民族主義者の間で，外来者の『妾』へと変容」（p. 219）し，「ニャイが資本主義の犠牲者と観念されだした」（p. 229）。そこで，「外来者が現地人女性をニャイにすることへの批判は，民族主義者やムスリムの間で盛んであったが」（p. 228），現実には 1910 年代から 30 年代にかけて，「混淆婚（現地人男性が関わる場合，および内縁関係も含む）」はむしろ増加していた（pp. 225–228）。これを著者は「興味深い事例」と見なし，「民族間の垣根が高くなればなるほど，こうした女性（ニャイ？：評者）の存在は重要となったのだ」とコメントしている（p. 236）。

1937 年にヨーロッパ人女性保護を目的とした新婚姻法案が議論される段階では，ニャイの存在は是正されるべき「ニャイ問題」（p. 235）として争点化した。この頃を境にニャイ慣行は弱化する。著者はこれを，「インドネシアの枠組のもととなるネットワークを形成したユーラシアンや華人系住民の活動を支えてきたニャイも，社会的役割を終えるときが近づきつつあったのだ」（p. 237）と表現し，この一文を以て本書におけるニャイの記述は一旦終わる。日本軍政と独立運動を経て，1949 年のハーグ円卓会議後に彼らは現実に表舞台を去った（p. 250）。

しかし，「おわりに」で著者は再びニャイに言及しつつ，本書の意義をまとめている。ここでは，表舞台から姿を消した仲介者やその子孫たちが外来者を含む社会の統合に果した役割が強調されている（p. 259）。そして，分断や対立が進む今日の社会においてこそ，かつてのニャイのような仲介者が必要だと述べ，ここでリスクを負って媒介を担う当事者のみが経験する「自由空間」（p. 262）が存在しうることを示唆しているのが印象的である。

上記のような，尊称としての「ニャイ」を中心とした，著者の「一時結婚」あるいは「内縁関係 concubinage」像を読了後，先にも触れたアンダヤの論文「一時妻から売春婦へ From Temporary Wife to Prostitute」［Andaya 1998］に目を通すと，一挙に暗澹たる状景が開ける。両者の歴史像の大きな違いの主因は「奴隷」の扱いにありそうだ。

なるほど著者も，「外来者と奴隷」（pp. 74–77）の小見出しを設け，オランダ人が「奴隷を重宝した」こと，1672 年のバタヴィア城内の総人口の約半数を奴隷が占めた（pp. 76–77）事実を記す。一方アンダヤは，貨幣経済と商品化が進展するなか，貧しい外来者が増え続け，かつては奴隷にも留保されていた伝統的な価値観がなしくずしに潰えた結果，「18 世紀末までに，一時妻は東南アジア世界から消えることはなかったが，彼女たちがかつて享受した尊敬は失われ」，「内縁の妻は売春婦と同等視される傾向」にあって，一時妻の立場は根本的に損なわれた［Andaya 1998: 27–28］と書く。このような 17 世紀から 18 世紀の間に生じたドラスティックな変化が本書では十分に明らかにされていない。

さらに，オランダ東インド会社の訴訟文書の新開拓に基づいてバタヴィアの底辺層の人々の生活を暴き，「奴隷」をタイトルの一部に掲げたジョーンズの著書［Jones 2010］では，女奴隷と内縁の妻の区別がつかないとされる。ちなみにこの書物は本書の「参考文献」に載り（評者は未見），本文では「一七三三年以降バタヴィアにやってきたヨーロッ

パ人の約半数が，到着後六か月以内に死亡している」（p. 124）という17世紀・18世紀のバタヴィアにおける風土病問題を，ニャイの知恵が必要とされた分野として採り上げ，引用されている。この書に対するアンダヤの書評［Andaya 2011］は，ジョーンズの探究の労を讃えつつ，残酷さと搾取が横溢する一貫して暗い見通しがどこまで一般の（ordinary）アジア人女性の境遇を映しているかを問うている。この問いに対しては，今後さらなる新史料の開拓によって答えられなければならないだろう。

アンダヤらに比すと，本書の著者は総じて，言わばポジティブな視点から，従来の東南アジア史が看過しがちだった媒介者たちを論じている。そうした本書の姿勢には読者の関心を呼びうる喚起力があり，新書版にふさわしい東南アジア史への恰好の入門書となっていると言えよう。

（飯島明子・東洋文庫研究員）

参考文献

弘末雅士．2004.『東南アジアの港市世界――地域社会の形成と世界秩序』東京：岩波書店.

――――（編）．2013.『越境者の世界史――奴隷・移住者・混血者』横浜：春風社.

――――．2016.「近代インドネシアにおける民族主義の展開と『混淆婚』――ニャイと欧亜混血者の陰」『女性から描く世界史―― 17～20世紀への新しいアプローチ』水井万里子；伏見岳志；太田淳；松井洋子；杉浦未樹（編），18–33ページ所収．東京：勉誠出版.

石井米雄；桜井由躬雄（編）．1999.『東南アジア史Ⅰ　大陸部』（新版世界各国史5）東京：山川出版社.

小川　博（編）．1998.『中国人の南方見聞録――瀛涯勝覧』東京：吉川弘文館.

リード，アンソニー．2021.『世界史のなかの東南アジア上・下』太田淳；長田紀之（監訳）．名古屋：名古屋大学出版会.（原著 Reid, Anthony. 2015. *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*. West Sussex: Wiley-Blackwell.）

ストーラー，アン・ローラ．2010.『肉体の知識と帝国の権力――人種と植民地支配における親密なるもの』永渕康之；水谷智；吉田信（訳）．東京：以文社.（原著 Stoler, Ann Laura. 2003. *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley: University of California Press.）

Andaya, Barbara Watson. 1998. From Temporary Wife to Prostitute: Sexuality and Economic Change in Early Modern Southeast Asia. *Journal of Women's History* 9(4): 11–34.

――――. 2011. Review of *Wives, Slaves, and Concubines: A History of the Female Underclass in Dutch Asia*. By Eric Jones. Dekalb, Illinois: Northern Illinois University Press, 2010. *International Journal of Asian Studies* 8(2): 233–235.

Hirosue, Masashi. 2020. The Development of Indonesian Nationalism and Controversies over the Issue of "Mixed Marriages" in the Twentieth-Century Dutch East Indies. In *A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers in Southeast Asia: Role of Local Collaborators*, edited by Masashi Hirosue, pp. 211–232. Tokyo: Toyo Bunko.

Jones, Eric. 2010. *Wives, Slaves, and Concubines: A History of the Female Underclass in Dutch Asia*. DeKalb: Northern Illinois University Press.

西　直美．『イスラーム改革派と社会統合――タイ深南部におけるマレー・ナショナリズムの変容』慶應義塾大学出版会，2022，ii+276p.

ムスリムにとって，イスラームが自らの行動に正当性を与え，価値観の源泉になっていることは言を俟たない。世界中のムスリムは，この点において同一の存在である。しかしその一方で，現実世界に生きる者としての個々のムスリムは，その現実性ゆえにイスラームをもとにした各人なりの正当性や価値観を作り続けている。その結果，イスラームには，ムスリムを統合させると同時にムスリムに亀裂をもたらすという，パラドキシカルな力が存在することになる。地域研究からイス